

修士学位請求論文要旨

国木田独歩における Thomas Carlyle 受容

——「牛肉と馬鈴薯」「岡本の手帳」と

“The Diamond Necklace”の比較を通して——

国際日本学研究科 国際日本学専攻 文化・思想研究領域

4911246002

宋佳奇

本稿は、国木田独歩の代表作「牛肉と馬鈴薯」(『小天地』一九〇一年一月)および、その主人公である岡本誠夫の記した手帳という形式で発表された「岡本の手帳」(『中央公論』一九〇六年六月)の二作が、従来の独歩研究において全く検討されてこなかった Thomas Carlyle, "The Diamond Necklace"の内容から強い影響を受けて成立した作品であることを明らかにするものである。

Carlyle は、独歩の生涯にわたり、その思想形成に極めて大きな影響を及ぼした海外文学者の一人である。「驚異」という概念を中心とした独歩の思想が顕著に表れた作品群のうち、「牛肉と馬鈴薯」と「岡本の手帳」の両作はいずれも、Carlyle の "Awake, poor troubled sleeper: shake off thy torpid nightmare-dream" を引用している。この一節は、Carlyle がフランス革命前夜の陰謀事件である首飾り事件を素材として執筆したテキスト "The Diamond Necklace" 第一章 "Age of Romance" に由来することが近年指摘されたにもかかわらず、当該テキストが独歩に与えた影響については検討がなされてこなかった。

そこで本稿では、"The Diamond Necklace"、特に独歩による引用が見られる第一章 "Age of Romance" の内容を踏まえ、「牛肉と馬鈴薯」と「岡本の手帳」における独歩の Carlyle 受容を再検討する。

第一章では、これまでの独歩における Carlyle 受容に関する先行研究を踏まえつつ、右記のような問題の所在と本稿の目的を示す。

第二章では、「The Diamond Necklace」と「牛肉と馬鈴薯」および「岡本の手帳」との比較に先立ち、独歩が引用した英文を含む "The Diamond Necklace" 第一章 "Age of Romance" を中心に、Carlyle のフ

ランス革命観や、テキストに見られる歴史叙述の特徴を検討し、その中に現れる特異な概念としての "Romance" について確認した。

"The Diamond Necklace" 執筆当時(一八三三年)、フランス革命をめぐっては、革命以前の貴族社会の文化の価値を認め、革命を批判的に見る立場と、自由・平等・友愛を掲げた新たな革命の理念を支持する立場との対立があったが、Carlyle はいずれにも与することなく、一貫して距離を保っていた。彼は歴史叙述において、過去の出来事をあたかも現在のこととして語り、時に過去の人物にも呼びかけるような語り口を用いる。過去の出来事と、それを叙述する現在のイギリスを重ねてしまうような特殊なレトリックは、例えば、フランス革命前夜の人物が護衛を呼びつけようとする際の、ロンドン塔の近衛兵を指す "beef-eater" という言葉の選択や、フランス革命層 "Sansculotte" にとっての当時のフランスでは流通していなかった "Irish potatoes" の価値についての言及などにも表れている。このように、本来隔たりのある事柄を、あたかもその隔たりが存在しないかのように描くことで、Carlyle は時空を超えた超越的な概念としての "Romance" を提示するのである。Carlyle が "The Diamond Necklace" を通じて、主張しようとする特別な理念は、この "Romance" である。

"The Diamond Necklace" は文章の第一章を割いて、首飾り事件の具体的な情報に一切触れることなく、"Romance" について論じている。ここで語られる "Romance" は、「どこでも」どの時代にも存在し得る普遍的理念である。しかし、それを見いだすことは極めて困難であり、Carlyle 自身を含めて多くの人々は "Prosaists" に属するといふ。これに対して Carlyle にとっての "Poet" は、あらゆる時代において "Romance" を描き得る者である。Carlyle は自らを "Prosaists" に属する者と位置付

けつつも、同時に“Poet”を志向している。つまり、“The Diamond Necklace”におけるCarlyleは、必ずしも“Poet”としての資質を持たない“Prosais”の一人としての自覚を語りつつも、“Poet”が見いだせるような“Romance”への追求の姿勢を表現している。

第三章は、“The Diamond Necklace”で語られている“Romance”の特徴を念頭に置きながら、その一節を引用した「牛肉と馬鈴薯」を改めて検討するものである。「牛肉と馬鈴薯」では、「実際」を「牛肉」に、「理想」を「馬鈴薯」に喩えて、自身がいずれの立場に立つのかを語り合う人々に対して、主人公である岡本は、そのいずれの立場にも立たないと述べて、「喫驚したい」という人々に理解されたい希求を語っている。しかし岡本は「決して勝手に驚けない」とも述べる。

岡本は、自身を含め世の多くの人間が「平気な人」に属すると述べてつつも、「驚く人」というもう一つの人間像を提示する。自己の存在や人生のあり方を問わずにいられない者の心から流れ出るものが「詩」であると、岡本は語る。岡本における「驚く人」と「平気な人」の対比は、“Carlyle”における“Poet”と“Prosais”の対比に対応している。しかも両者は、自らを「平気な人」あるいは“Prosais”に属する者と位置付けつつも、同時に「驚く人」あるいは“Poet”を志向するという、微妙なスタンスに立っているのである。

また、第二章で論じた、貴族社会の価値観を象徴する“beef-eater”と、革命の理想を担う“potatoes”を食す“Sausculotte”という二項対立の構図に基づけば、「牛肉と馬鈴薯」における「牛肉」と「馬鈴薯」という食べ物のモチーフも、“The Diamond Necklace”の影響として考えることができる。Carlyleと独歩が、実現困難でありながらもなお強く

追い求めるのは、こうした二項対立を超えた、超越的理念としての“Romance”と「驚異」なのである。

第四章では、“岡本の手帳”と“The Diamond Necklace”との比較を行った。“岡本の手帳”は、“牛肉と馬鈴薯”と同じ主人公である岡本が「驚異」への希求を強く語る文章である。しかし、「驚異」が実現し得るかどうかをめぐって、両者のあいだには微細な差異が認められる。「牛肉と馬鈴薯」では「驚けない」こと自体が問題化されていたのに対し、「岡本の手帳」では「時には驚異の念に打たるゝ事あるは人々の経験する処なり」とされるが、それが「永続せず」に終わることが問題とされるのである。

「岡本の手帳」において、なぜ刹那的に「驚異」を感じ得るとされているのかを考える際、“The Diamond Necklace”においてCarlyleは“Romance”を体験することの限界を自覚しつつ、なお“glimpses”という表現に見えるように、一瞬だけそれを垣間見たのだと述べている。この点で“The Diamond Necklace”におけるCarlyleと岡本の姿勢は重なり合う。

そして、この実現しがたい願望への希求を表現するために、“Carlyle”が現在形で過去の人物に呼びかける手法と同様、「岡本の手帳」においても「今何処にある」「何処にある」と繰り返し、過去の人物への呼びかけがなされている。過去の人が現世に存在しないことは自明であるにもかかわらず、Carlyleと岡本は、歴史上の人物に直面し得るかのような時空を超えた想像力のあり方を示す。と同時に、両者は、所在すら分からないことを示す疑問文を用いることで、自らの認識の限界を提示してもいるのである。

第五章は、以上の「牛肉と馬鈴薯」と「岡本の手帳」の主人公である岡本が語る「驚異」と、Carlyleが“The Diamond Necklace”において言う“Romance”の類似点を踏まえつつ、作者である独歩自身における「驚異」の捉え方を、先行研究を参照しながら改めて考察した。先行研究では、独歩は「驚きたい」という念願を実現したと論じる立場があった。他方で、独歩は驚くことができなかつたものの、それでもなお「驚異」への願望を放棄しなかつたのは、Carlyle的な理想的人間像へと接近したからだと、という説も存在する。

しかし本稿の議論に即してみれば、“The Diamond Necklace”を書いたCarlyle自身もまた、瞬間的にしか“Romance”へと到達し得ない人間として自己を捉えていたことが分かる。即ちCarlyleも岡本も、さらには独歩自身も、自ら提唱する理念を追い求めながら、それを決して容易には到達し得ない境地として措定している点において、共通した姿勢を有しているのである。Carlyleが独特の理念を語るテクストは、独歩に影響を与えたCarlyleの他の著作にもある。しかし、理念に対する自らの限界を自覚しつつも、なおその願望を実現し得る人間像を志向し続けるという、この微妙なスタンスを示している点においては、むしろ“The Diamond Necklace”の影響こそが顕著である。

「牛肉と馬鈴薯」および「岡本の手帳」が“The Diamond Necklace”から受けた影響は、単に“Awake, poor troubled sleeper: shake off thy torpid nightmare-dream”を引用したという事実にとどまらず、中心理念としての「驚異」、さらには具体的な表現手法のレベルにまで及んでいるのである。

第六章は、本稿の議論を総括し、“The Diamond Necklace”において提示されている、時空を超えて遍在するかのように極大なスケールの視野から捉えられる“Romance”と、独歩にとって超越性を帯びた概念である「驚異」という二つの概念を、「宇宙」というイメージに着目しつつ考察した。

本稿で検討した“The Diamond Necklace”だけではなく、独歩の日記においても言及されている、Carlyleの友人Froudeによって整理されたCarlyleのノートには、“individual”や“infinite”といった語彙を“universe of time and space”と結びつける形で、個人と無限の時空間との関係性を捉えようとする「宇宙」観が見られる。これらの「宇宙」観を併せて考えると、Carlyleと独歩に共通して見出されるのは、個人の精神が世界と出会う場として、広大無辺の「宇宙」を想定している点である。

このような極大化された「宇宙」観は、国木田独歩という作家が、なぜ日露戦後に不評から一挙に人気へと転じたのかという問題、いわば個人が世界的視野へと接続されていく発想の時代的転換とも深く関わっていると考えられる。

また、本論に収めきれなかつたものの、本稿で検討してきた独歩の“The Diamond Necklace”受容に関して、今後の研究の展望に繋がりが得る問題について、三点にわたって、補論として示した。

まず、西洋文芸思潮の展開を踏まえつつ、独歩には必ずしも十分に理解し尽くされていなかった可能性のある、Carlyleにおける“Romance”概念の特徴について、より詳細な検討を行った。Carlyleの

“Romance”に対する独特な見方と、独歩の言う「驚異」との間に生じ
るずれを通して、明治期に西洋思想を受容する過程における、日本
と西洋との歴史的背景の差異が浮かび上がる。次に、「岡本の手帳」
の執筆時期が従来確定していないという問題が、独歩が“The
Diamond Necklace”に接した時期の問題とも密接に関わる点に着目し
た。「岡本の手帳」に加え、独歩の日記『欺かざるの記』や他のテク
ストにも“The Diamond Necklace”と類似する表現が見られることから、
独歩が比較的早い段階で“The Diamond Necklace”に触れ、その表現を
「岡本の手帳」などの文章に反映させていた可能性について、新た
な見解を提示した。最後に、一八九六年に独歩と親交のあった内村
鑑三の旧蔵するCarlyleの著作の中に、“The Diamond Necklace”を収録
した一冊が存在していたことが確認できる。これを踏まえ、内村を
媒介として独歩が“The Diamond Necklace”に触れた、あるいは触れ直
した可能性についても検討を行った。

なお、管見の限り、“The Diamond Necklace”の邦訳は、独歩没後の
四年に高橋五郎が訳した、全訳ではない「金剛石の頸環」（高橋五郎
『カーライル論説集』有倫堂、一九一二年一月）しか確認できな
い。そこで参考のため、高橋訳と拙訳を併記し、比較検討を試みた。
独歩が引用した英文を含む“The Diamond Necklace”第一章“Age of
Romance”については、原文（初版）、高橋訳、拙訳の対訳を資料編と
して添付する。